

鄭安基「朝鮮人陸軍志願兵の真実」

鄭 ご紹介頂きました、落星台経済研究所の鄭安基と申します。本日は1938年から43年にかけて日本軍に入隊した、朝鮮人の青年たちの話を申し上げたいと思います。それをテーマに韓国で2020年『忠誠と反逆』という本を出しましたが、韓国ではこのような場を私に用意してくれたところはありませんでした。日本から私に対して発表の場を用意していただいて感謝しております。この本は約5年程度の時間をかけながら出した本です。内容は、日本軍での生活を通して軍事知識を学び、実践を積み、ここで言う実戦経験とは日中戦争とアジア・太平洋戦争の参加でした。終戦後に韓国軍を組織する際に、そうした経験を持つ韓国人が能力を発揮するようになります。そして1950年に起きた朝鮮戦争で、北朝鮮から国を守る大事な役割を果たしました。これらの韓国の英雄たちの歴史を申し上げたいと思います。

彼らは終戦後、韓国の建国と韓国軍を作るのに重要な役割をしたにも拘らず、終戦後の韓国国内では親日派という批判を受けました。建国の主役だった彼らは、韓国国内では呪われた英雄たちになったわけです。それで私は本の中で、彼らを黒歴史の中で生きていた幽霊たちだという風に名付けました。書籍の内容は第1部と第2部に分かれています。前者は「帝国の尖兵」というタイトルで、朝鮮の青年たちが日本軍に入隊して活躍した内容について書きました。後者は祖国の干城、つまり朝鮮戦争において韓国軍として活躍した彼らの活動について書きました。最後の方で台湾とインドを例に出して、国際比較を行いました。

朝鮮の青年たちの軍事動員については、時代によって大きく4つの種類があったのですが、最初は今日皆さんに説明していく陸軍特別志願兵です。その後、海軍特別志願兵、学徒志願兵、そして1944年から始まった徴兵があります。陸軍特別志願兵は1938年から終戦まで約1万7000人ほどです。朝鮮人青年約11万5000人が日本軍に入隊し、軍事の経験を得たのです。最初の陸軍特別志願兵の制度を分析しないと、海軍特別志願兵や学徒志願兵の考察ができません。そういう点で、今日私がお伝えする話は朝鮮における軍事動員を考察する上で非常に大事な内容だと思います。まずは陸軍特別志願兵の制度について、簡単に説明したいと思います。

これは1938年2月に公布された勅令第95号「陸軍特別志願兵令」による志願制度なのですが、元々日本兵役に適用されていない台湾人と朝鮮人に対して志願による兵役を与えた、日本最初の植民地の人に対する軍事動員の制度です。簡単に言うと、1938年から43年の間に台湾と朝鮮の植民地出身の陸軍志願兵として動員された兵員たちのことを言います。次の表は1938年から43年までの志願兵たちの人数を表した数値ですが、大きく6つの項目があります。

募集定員、志願者、そして適格者があります。この適格者は、1次選考に合格した人のことを言います。その次の入所者は、2次選考に合格して訓練所に入った人、そして入営者は、3次選考で朝鮮軍司令部から入営を許可されて最終的に部隊に配置された人たちです。一番右の志願倍率を見れば、競争がどれだけ激しいかが分かりますが、平均値は一番右下にある48.7%です。ここで注目したいのは、一番左にある募集定員の

区分	募集定員	志願者	適格者	入所者	入営者	志願倍率
1938	400	2,946	1,381	406	395	7.4
1939	600	12,348	6,247	613	591	20.6
1940	3,000	84,443	33,392	3,060	3,012	28.1
1941	3,000	144,745	44,884	3,277	3,211	48.2
1942	4,500	254,273	69,761	5,017	4,917	56.5
1943	5,000	304,562	69,227	5,330	5,223	60.9
合計	16,500	803,317	224,892	17,703	17,350	48.7

陸軍特別志願兵の集計【作成：鄭安基】

変化です。38年では募集定員は400人でした。しかし、2年後の40年では募集定員が3000人に増えました。その後は4500人から5000人まで増えていることが分かります。募集定員の倍率を見ると、時間が経過するほど競争率が上がります。43年の場合は60.9%の高い倍率を記録しています。

この表は驚くべき事実を示しています。私も最初に見た時、とても驚きました。そして、真偽を確かめるために研究を始めて、この表に出ている事が事実であることを確認いたしました。韓国の歴史教育や歴史観は日本の支配と収奪という認識しかないので、そういう認識を以てしてはこの表を理解することができません。

次に、陸軍特別志願兵制度がどのように成立したのかについて話したいと思います。先ほども言いましたが、1938年2月に特別志願制度が成立したのですが、その前の状況について触れたいと思います。1919年に3・1運動が発生した直後、韓国人は日本政府に対して参政権を要求します。政治に参加できる国民の権利を要望したのです。しかし日本政府は、朝鮮はまだ教育水準が低くて民度が一定まで達していないという理由で、参政権を与えるのを断ってきました。

3・1運動という抗日運動が起きてから、朝鮮の中には親日的な団体が登場し始めます。その代表的な団体に国民協会という団体があるのですが、この国民協会は1920年から1942年まで毎年、日本政府に対して強く参政権を求めようになります。しかし参政権要求に対して、帝国政府は先ほど申し上げたように朝鮮の教育水準と民度を理由に、参政権を与えるのを断ってきました。それは参政権を与えること自体が駄目だというのではなく、時期尚早という理由です。

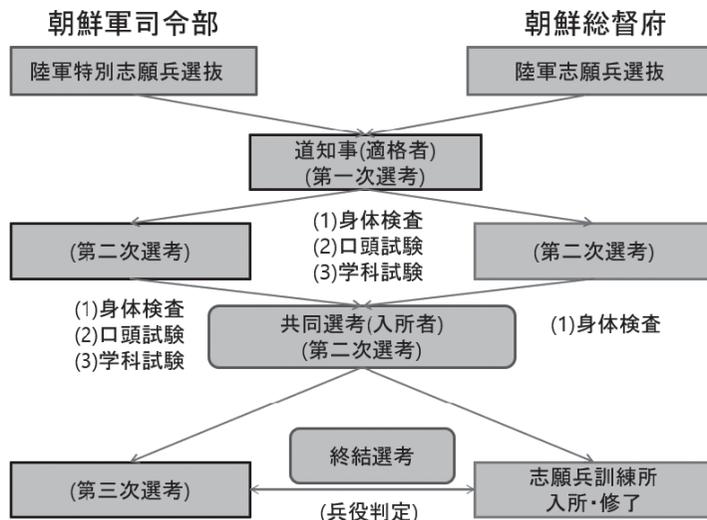
1931年に満州事変が発生すると、朝鮮人社会の日本についての視点が変わります。反日から親日に変わる社会環境的な変化が起こるのです。日本は強い国だ。日本は支配者ではなく朝鮮を守ってくれる存在ではないか、という考え方が広がり、朝鮮内には親日的な雰囲気が出始めるようになります。朝鮮国内にいた親日的な団体、そして親日的なエリート層の知識人たちは1933年から、朝鮮人に対しても徴兵制度を導入してほしいと帝国議会に請願するようになります。なぜ彼らは日本政府に徴兵制を求めたのでしょうか。参政権とは国民の権利です。一方で、徴兵制は国民の義務です。これは

コインの表裏とも言えます。つまり、朝鮮人が徴兵という国民の義務を果たせば、参政権という国民の権利も付いてくるのではないかと考えたのです。朝鮮の当時の親日的なエリートたちは、参政権を得るために徴兵制を提案したわけですが、それを日本政府から断られると、また次の作戦に出ます。

教育水準が低くて徴兵制ができないなら、朝鮮人の中で十分な教育を受けた者を兵士として選抜して軍隊に入れたらどうだという志願兵制を、朝鮮のエリートたちは考えるようになります。これは日本政府も、朝鮮総督府も、朝鮮軍司令官も認めるようになります。1937年1月から朝鮮総督府と朝鮮軍司令官が積極的に検討している最中、日中戦争が勃発しました。そこで、38年2月に朝鮮特別志願制度が成立し、迅速に推し進められるようになります。朝鮮総督府の考えは、志願兵制度を通して朝鮮人を日本国民にする政策動力として活用することです。このような素晴らしい韓国人もいるのではないかと、皇民化政策の一つの象徴として朝鮮人志願兵を前面に出すようになりました。

そうした政治的な目的がありましたが、朝鮮人エリートたちは1919年以降20年間、参政権問題を意図し、戦略的に徴兵制を要求する行動を取ります。彼らは将来的に朝鮮の自治と独立を目指しました。1938年から始まったこの陸軍特別志願制を、韓国では強制動員として認識していることがほとんどですが、私はそう思いません。これは強制されたことではありません。朝鮮総督府からの圧力と強制性がなく、朝鮮のエリートたちは参政権を得るための一つの手段として、そして総督府は朝鮮人たちを帝国臣民の一人として育てていくためにという、政治的な相互依存関係があったからこそ生まれた制度です。

志願についての手続きや条件について説明します。17歳以上なら誰でも志願できました。条件としては、小学校卒業、体格は甲種以上、身長は160cm以上です。当時の日本人に要求された身長は155cmでした。そして朝鮮総督府が開設した兵力特別支援訓練所で6ヶ月の教育を受けて合格しなければ、日本軍に入ることはできませんでし



朝鮮人陸軍特別志願兵の選考システム【作成：鄭安基】

た。そして当然のことですが、志願者の家族から許可が必要です。面白いのは、一定水準以上の家計の経済力が必要だったことです。この手続きの条件を見ると、志願制であって、強制性がないことが分かります。

手続は大きく分けて二つの条件を満たさなければなりません。一つは、朝鮮総督府に対して陸軍志願兵の訓練所へ入所する必要がありました。もう一つは、朝鮮軍司令部に対して陸軍兵服務志願という申請を別に行う必要がありました。そのため、陸軍特別志願兵制度は三次に渡る選考を行う複雑な選抜システムでした。

選考システムを簡単に図にしましたが、左の朝鮮軍司令部から志願する方法、そして朝鮮総督府から選抜して、それが道知事（日本における県知事）によって適格者として認められる必要があります。こうして、三次にわたる選考で志願兵として訓練所に入ることになります。次の表は1938年から42年までの選考結果を示しています。

区分	志願者		適格者		入所者		入営者	
	人員	比重	人員	比重	人員	比重	人員	比重
南朝鮮	505,544	62.9	129,594	57.6	10,961	62.3	2,290	58.4
北朝鮮	297,773	37.1	95,298	42.4	6,643	37.7	1,631	41.6
合計	803,317	100.0	224,892	100.0	17,604	100.0	3,921	100.0

選考結果（1938年～42年）【作成：鄭安基】

応募者、適格者、入所者、入営者、そして人員、比重。出身地を示す南朝鮮と北朝鮮の項目があります。出身地別の比重を見ると、南朝鮮地域の若者が多いことが分かります。この選考結果の資料から、朝鮮人陸軍特別志願兵は南朝鮮地域出身者が多数を占めていたことが分かります。

応募者の年齢に関してですが、17歳以上と言われていますが、27歳まで応募をしています。全体的に19歳から22歳が多く、入所者も同じ年齢層が一番多くなっています。入所者の教育水準ですが、基準である小学校6年以上が一番多いのですが、時代の流れによって学歴が高い者からも志願者が出るようになります。そして最終的には専門学校卒業生も志願兵の中にいました。

区分	家族関係							身分関係			
	独身	1人	2人	3人	4人	5人	合計	戸主者	長男	次男	合計
南韓	223	862	2,994	8,688	13,884	31,814	58,465	5,108	16,673	36,683	58,464
北韓	104	449	1,699	4,377	7,898	22,042	36,569	3,124	11,288	22,158	36,570
合計	327	1,311	4,693	13,065	21,782	53,856	95,034	8,232	27,961	58,841	95,034

志願者の家族と身分（1941）【作成：鄭安基】

応募者の家族と続柄の例ですが、1941年の資料では全体的に兄弟の多い家庭ほど志願する傾向が高く、次男が志願者となる場合が多いです。志願兵応募者は基本的に南朝鮮出身で、大家族、そして次男であるという3つの要素が出ています。

区分	100円未満	100円以上	1000円以上	5000円以上	1万円以上	10万円以上	50万円以上	合計
南韓	4,578	21,186	22,513	7,968	1,976	237	7	58,465
北韓	3,067	12,844	14,105	4,855	1,655	42	2	36,570
合計	7,645	34,030	36,618	12,823	3,631	279	9	95,035

志願者の家計資産（1941）【作成：鄭安基】

もう一つ追加する必要があります。1941年を見ると全体的に1000円以上の家計資産がある家からの応募者が最も多く、最高の比重となっています。当時の1000円は牛1頭が100円だったので、10頭の牛を所有できる資産力と言えます。これを見ると、志願者たちの家計の水準が貧困ではなかったことが分かります。

次は支援者の動機と心理です。こちらも1941年の事例です。

区分	志願動機				心理状態					
	自発	慫慂	その他	合計	愛国心	功名心	功利心	職業心	その他	合計
南韓	28,279	52,979	10,302	91,560	23,115	21,186	14,694	9,734	22,831	91,560
北韓	50,184	79,672	15,190	145,046	40,453	33,454	21,795	15,081	34,263	145,046

志願者の動機と心理（1941）【作成：鄭安基】

特別志願兵として選ばれた人を対象にして、朝鮮総督府が調査した記録です。志願動機の中で、慫慂（しょうよう）という言葉がありますが、意味は勧誘と似ています。表を見ると、志願動機は自発と慫慂がありますが、右の心理状態と合わせて考えると矛盾点があります。今までの韓国内の研究においては、志願動機の中で慫慂というキーワードをもって、これが強制性の証拠だと言ってきました。しかし、もし慫慂が強制的な動員の証拠なら、右側にある心理状態が説明できないという問題が残ります。慫慂の実態は、先生や親、周囲の人間から志願兵制度があるので一度応募してみてもどうかと勧められた、という意味で使用されているのではないのでしょうか。つまり、日本人からではなく朝鮮人から慫慂されたというわけです。このように解釈すれば、心理状態と総合的な説明が可能ですが、もし強制的なものだったら、右側の心理状態が説明できません。

当時の朝鮮社会を理解するうえで両班（ヤンバン）と常民（じょうみん）の身分制度をおさえる必要があります。北朝鮮は常民という一般階級の者が多く住んでおり、早い時期にキリスト教が流行し、教育水準が高く、人々が考えることは非常に合理的です。そのような社会では志願率は高くありません。しかし、南朝鮮は特権階級である両班と常民が混在して生活しており、身分による差別が存在していました。朝鮮内に存在していた身分制度による差別が、志願率に影響したと思われます。

この説を立証するには、当時の朝鮮内で身分による差別が起こっていたことを証明する必要があります。そこで私は、1920年代から30年代までの当時の新聞記事を整理しました。すると、差別に関連する記事が数百本出てきました。これらの記事は全部南朝鮮側から出ています。北朝鮮側の場合は出ていません。両班が常民をいじめたとか、常民と結婚しなければいけない両班が結婚を取り消したとか、常民と結婚するのが嫌で逃げた、もしくは常民から侮辱された両班が自殺したといった内容が確認できま

す。これを見ると、両班と常民の間で差別が強かったことが分かります。

中流農家(常民)の子供たちは小学校に通い、そこで平等に関する授業を受けるのですが、学校の外を見みると、やはり身分制度が強く残っていて、自分と自分の家族は動物みたいな扱いをされていることに彼らは気づきます。彼らは当然、そういう現実に対して反発して怒るようになります。そしてそれを克服するために、彼らは「志願兵制」を利用するようになります。朝鮮人志願兵の志願率があまりにも高いので、朝鮮総督府は志願者たちの家の政治性向や背景について調べるようになりました。総督府の調査によって判明したことは、彼らは出世志向が強いこと、南朝鮮地域の人が多かったこと、そして身分制度に対する変動が容易である中農階級であったということでした。

以上のことから、南朝鮮が北朝鮮よりも志願率が高かった要因には、両班の差別から脱出するために軍隊を通じて出世しようとする常民が多かったからだと考えられます。志願動機に関して学習院大学の宮田節子教授は、朝鮮人たちが志願制に応じたのは日本と朝鮮の間にある民族差別から脱出するために志願したという解釈をしていますが、私の研究結果によると、それは完全な嘘です。

朝鮮の青年たちが志願制に応じた理由は、社会内部の差別、つまり両班階級による差別から脱出するために志願制を利用したわけです。宮田教授は社会からの差別から脱出するため、つまり民族差別から脱出するために志願していた、と解説しますが、志願者のほとんどは田舎出身です。田舎には日本人がいなくて、ほとんどの朝鮮人は日本人と接する機会がほとんどありませんでした。日本人と接するチャンスがないのに、日本人から差別を受けたということは成立しないはずです。当時、朝鮮半島には60万から70万人の日本人がいましたが、彼らはほとんどが都会に住んでいて、田舎地域にはいなかったのです。田舎地域の志願者が多かった志願兵が、民族差別から脱出するために志願した、というのは成立しないと思います。それでも韓国社会では、宮田節子教授の『朝鮮民衆と「皇民化」政策』という本が今も読まれています。

この写真は陸軍特別志願兵一期生の入所式の写真です。6ヶ月の訓練期間中で、5ヶ月目に日本への修行旅行として東京に行き、陸軍大臣の前で並んでいる光景です。

私は志願兵の生存者にインタビューしたことがあるのですが、彼らの身長は175cmくらいでした。その当時の平均的な日本人の兵士よりは体格が大きくて丈夫な青年たちが、特別志願兵として選抜されたことが分かります。

志願者が増えることによって訓練所が増えるようになりました。1938年当初、京城に第一訓練所があったのですが、ここでは第一期生から十三期生まで志願兵を輩出しました。1942年に平壤に第二訓練所が建設され、そこでは一期



東京駅に到着する朝鮮人陸軍特別志願兵

【提供：鄭安基】

生から三期生までが輩出されました。6年間で志願兵訓練所を修了した人数は17,000人に上ります。

志願兵たちが入所してから6ヶ月間の体重の変化を記録した、1938年の資料が残っています。驚くべきことに、訓練所に入った志願兵たちは、最初に比べて体重が徐々に増えています。なぜそうなったのでしょうか。志願兵たちは田舎出身が多かったため、白米を食べたことはあまりなかったです。そして、肉類を食べる機会もほとんどありませんでした。そして朝鮮は衛生関係などから寄生虫が多く、特に消化器系の病気、消化不良が多くみられました。韓国の伝統的な食習慣として大食というのがあって、実際食べる量は日本人の3倍、4倍くらいの食事量がありました。

志願兵に対して訓練所では毎週体重を測ったり身体検査を行います。それをしながら寄生虫に対する薬を与えたりして病気を治していきます。そして食事には白米を食べるようになり、魚肉類も食べることができました。さらには間食でカステラなどを食べることもありました。当時の志願兵たちに提供した食事の量や、食事にかかる費用に関する記録が残っています。それを見ると、彼らの食事は日本内地にいる中産階級の人たちが食べる食事と同じレベルのものが与えられました。志願兵たちの回顧録を見ると、様々な話を書いてあるんですが、その中で必ず書いてあるのは食事に関する話です。訓練所に入って初めて白米を食べたとか、食事に対する満足度が書かれており、ここは天国のようだと言っています。

次は部隊の配置についてお話しします。1938年は主に19師団、20師団という朝鮮半島に常駐していた部隊に集中的に配置されましたが、40年には部隊配置が日本帝国へ拡散されました。特定の部隊にのみ集中配置されていなかったことが分かります。20師団は朝鮮軍の中心部に配置されていましたが、その部隊は日中戦争勃発の3日後に戦線に入っています。1939年5月、一期生の志願兵たちは1等兵となっており、初めての实战となったのです。日本の陸軍省は日中戦争に投入された朝鮮人志願兵たちが健闘したことを、報告書として記録に残しています。その報告書には、朝鮮人志願兵は忍耐強く、日本人兵士と比較して重装備で長距離移動しても疲弊しない、積極的に戦闘に参加して戦果を出していることが書かれています。

20師団に配属された一期生志願兵は95人でしたが、2人が戦死しました。その中の一人に李仁錫上等兵という人物がいます。この人は20師団の78連隊の兵士として戦闘に参加して、戦争から間もない6月に戦死することになります。この人が一期生志願兵で初めての戦死者となりますが、彼の戦死が朝鮮国内に伝わると面白い現象が起きます。彼に対する追悼の熱気があまりにも広く、熱く湧き上がったのです。李上等兵の葬儀は20師団司令部、彼が卒業した訓練所、彼の故郷の3回にわたって行うことになりました。李上等兵は朝鮮の忠魂と言われ、金鷄（きんし）勲章が授与され、韓国内の新聞や雑誌を通して彼の名前が大々的に報じられました。

李仁錫を始めとした当時の朝鮮人志願兵は朝鮮半島でアイドルのような扱いになるのですが、1941年11月に「君と僕」という映画が公開されます。この映画は朝鮮最初の国策映画であり、日夏英太郎という朝鮮人監督が製作し、当時有名だった李香蘭などが出演して200万人という観客を集めました。当時は日本国内でも100万人は難しいと言われていたことを考えると、この映画がどれほどヒットしたかが分かります。そし



映画「君と僕」【提供：鄭安基】

てこの映画は、満州国や東南アジア諸国にも輸出されました。

以降、朝鮮人志願兵は詩、小説、映画、歌、演劇などの主人公として出てきます。これは国民文化、国民映画といった「国民」という認識が本格的に朝鮮社会に登場したことを示しています。残念ながら、韓国国内では文芸関係の研究者なども、こうした事実を把握しておらず、研究されていないのが現状です。

次に戦争に参加した朝鮮人志願兵の戦死率に関してですが、彼らはフィリピン、東部ニューギニア、ビルマなどに配置されました。ここで興味深い点は、例えば20師団の記録を見ると、師団全体の戦死率は96%という高い数値を見せているのですが、朝鮮人志願兵の戦死率は84%と、10%以上戦死率が低いのです。なぜこのような現象が起きたのでしょうか。

区分	派兵時期と地域		師団全体			朝鮮人陸軍特別志願兵				
	地域	年月	動員	戦死	戦死率	動員	生還	戦死	戦死率	
常駐師団	第19	フィリピン ルソン	1944・12	12,328	8,233	66.8	1,888	947	941	49.8
	第20	東部 ニューギニア	1943・1	25,591	24,780	96.8	1,901	298	1,603	84.3
臨時師団	第30	フィリピン ミンダナオ	1944・5	16,249	12,892	79.0	1,247	270	977	78.3
	第49	ビルマ ムドン地区	1944・6	17,167	8,826	51.4	963	518	445	46.2
合計	-	-	-	71,335	54,731	73.5	5,999	2,033	3,966	66.1

朝鮮軍の動員と戦死【作成：鄭安基】

20師団の東部ニューギニアでの戦闘では、日本軍は撤退のために高い山々を超えていかねばならず、その過程で食料供給が切断されます。飢餓やマラリアなどによって多くの日本兵が命を落とすのですが、朝鮮人は幼い頃から虫や病気が当たり前の環境で育ちました。細菌の入った水を飲むと日本人兵士は腹を壊しましたが、朝鮮人兵士は平気だったのです。つまり、朝鮮人志願兵は過酷な状況の中で生き残るための適応能力が日本人よりも強かったので、生存率が高かったわけです。

次は終戦以降の話ですが、5年間から6年間にわたって日中戦争、アジア・太平洋戦争を経験した朝鮮人士官兵たちは、軍事知識、実戦経験、そして国家観、軍人観、死生観を内面化していきます。彼らは韓国軍として1946年に軍事英語学校、そして朝鮮警備士官学校などの軍事学校を通じて、韓国軍の将校として任官するようになりました。そして、1948年4月3日に済州島で発生した共産党ゲリラによる反乱事件である4・3事件、同年10月19日に全羅南道で起こった麗水・順天事件を鎮圧する部隊長として活躍しました。

韓国軍には朝鮮戦争の英雄と言われている白善燁（ペク・ソニョプ）という将軍がいますが、白将軍が回顧録で、朝鮮人特別志願兵出身の部隊長に対する3つの評価を記しています。1つ目は実戦経験があるため、忍耐力が強く鍛錬されていることです。2つ目は思想的な問題がないということです。当時の韓国軍の中には共産主義者が多かったのです。軍の内部にも共産主義者がいたことが大きな問題になっていましたが、朝鮮人特別志願兵たちの中にはそういう人がおらず、信頼することができたと話しています。3つ目は抜群の指揮能力があることです。これは6年間の実戦経験から得た評価だと思えます。

1950年に朝鮮戦争が起こりますが、開戦当初は北朝鮮軍の圧倒的な軍事力に韓国軍は押され、洛東江で防御線をつくりました。そこには第1師団、第6師団、第8師団が配置されていましたが、この中には陸軍特別志願兵出身者の指揮官が多く、彼らは北朝鮮の進軍を止めて韓国を守りました。

特別志願兵出身の指揮官として、いろんな朝鮮戦争の英雄がいますが、その中で私が尊敬する1人の指揮官について紹介したいと思います。春川大捷という「春川地域で大勝利した」という言葉があるのですが、そこで活躍した林富澤（イム・ブテク）という人物がいます。彼は中領という地位にあり、第6師団第7連隊の隊長でした。彼の指揮によって北朝鮮軍2万人の侵攻を、5000人の兵士で4日間も食い止めました。これによって韓国軍は南に避難することに成功し、時間を稼いで国連軍と米軍が来るまで時間を稼ぐことができました。もし彼の活躍が無ければ、東側から迂回してきた北朝鮮軍に包囲されて、韓国軍は全滅したかもしれません。林の戦闘指揮と勝利は、世界の戦争の中でも輝く戦果をあげたと言えるほどの重要な戦闘だったのです。

私が出した『忠誠と反逆』という書籍に対して、なぜ逆説的な題名をつけたのかという質問をよく受けますが、私から見ると、朝鮮人特別志願兵たちは日本という祖国に忠誠を尽した人たちです。韓国から見ると、彼らは民族の裏切り者だという評価をされています。しかし、彼らは戦争の後には韓国軍として韓国という祖国に忠誠を尽しました。そして彼らが韓国を守ったのです。彼らは日本という国家に忠誠を尽したことで、強い国家観を持つことができました。それは国民としての自覚であり、それが韓国に対する

忠誠につながったのです。彼らは二つの祖国に対して忠誠を尽しました。日本と天皇に忠誠を尽したからこそ、大韓民国にも忠誠を捧げることができた。これが私の主張です。

それでは最後ですが、朝鮮人特別志願兵たちをどのように認識すべきかに関する話です。私はそれを、1948年の大韓民国の建国とつなげて考えたいと思います。なぜなら彼らは韓国の建国と韓国軍の創軍に関わった主人公であり、彼らが得た知識と経験は朝鮮人たちに近代国家の国民という自覚を初めて持たせました。つまり、彼らは近代国家の国民として生まれ変わる経験をしたわけですから。それを通して、彼らの経験と能力が1948年の韓国の建国につながったと思います。朝鮮人陸軍特別志願兵と韓国は切り離すことができない関係だと私は思います。そのおかげで、韓国は今やOECDの国家に入るほどの経済大国に成長しました。これらの土台をつくったのは、彼らの存在があったからだだと私は考えています。

しかし現代の韓国人は、韓国という国がいつ、どのようにして建国されたか、その背景に対しての認識がありません。国家が成立するためには3つの要素が必要です。主権と領土、そして国民です。主権や領土とは違い、国民は極めて近代的な産物です。空から落ちてくるものではありませんし、土から掘り起こされるものでもありません。つくられるものです。今の韓国で言われる通りに1945年8月から1948年8月までの3年間で国民がつくられるということはありません。大韓民国を作らせるような国民がいつ生まれたのか、それを誰も考えないのです。だから韓国は今、いろんな問題で危機的な状況に置かれているのです。

長くなりましたが、これで私の発表を終わります。ありがとうございました。